

わだち



Fukui

平成30年11月号



「ふくぶせんフェスタ」で模型運転会

にぎわうテント前
平成30年10月14日
岸本 雅行

第8回「ふくぶせんフェスタ」が10月14日(日)に福井鉄道北府駅周辺で開催されました。福井支部では今回初めて参加、Nゲージのジオラマによる模型運転会・HOゲージの福井鉄道車両の展示を会場のテント内で行いました。当日は朝から好天に恵まれ、親子連れなどの多くの来場者でにぎわい、福井支部のテント前は子供たちの歓声が響き渡りました。

目次	福井市内にもある廃線跡 [2] —大和紡専用線の痕跡を探る—	渡邊・和田	2
	酒井雅光アルバムから [10] —EF81型交直両用電気機関車1号機—	渡邊 誠	5
	身近な鉄道を観光資源に	岸本 雅行	6
	9月見学会(京福勝山大野間廃線跡)報告	和田一彦	7
	福井県内の鉄道関連ニュース(8・9月)		8
	応募要項		9
	事務局だより・終着駅		10

少年時代の回想

前号にて、渡邊会員から『大和紡専用線の痕跡を探る』の発表がありました。地元在住の私の方からも是非コメントをということで、大変恐縮ですが筆を執らせていただきます。

前号の図-1に地図がありますが、太枠で囲まれたかつての大和紡績福井工場跡地は、現在積水ハウスなどの住宅が建ち並ぶニュータウンへと変わっています。写真①～⑫までポイントを置かれてご説明されておりますが、現在では鉄道の痕跡など全く残っておらず、この鉄道の存在を知らない方にとってみればまさに想像と空想の世界ではないかと思えます。ただ私を含め地元の間人やこの鉄道を覚えている方・廃線マニアの方にとってみれば是非とも記憶に残しておきたい地元の鉄道の一つだと思います。今回は前号記載の写真の順に私の記憶を述べさせていただきますが、一部渡邊さんの報告と重なる箇所もありますがご了承下さい。

写真①の前方には福井新駅がありますがこの武生寄りにある踏切(現存)は、なんと有人の踏切でした。福井新の駅員が小さな踏切小屋に入り確か昇降式だったと記憶しますがこの専用線と福武線の両方を監視していました。

写真③の地点ですが以前この地は八幡山の裾でなだらかな丘があり畑が広がりヤギなどもいました。

この地で唯一痕跡が残るのが写真④でゆるやかにカーブする線路跡を想像できます。丁度丘と民家との境目でした。

写真⑤にある美容室は現在鉄筋の建物ですが、以前は木造の建物で店の真横に線路が通り柵などは無かったと記憶しています。手前が旧国道8号線でいよいよここを横断しますが、これがこの大和紡専

用線の一番のハイライトシーンであり、人々の記憶に残っている要因ではないでしょうか。この踏切の手前で運転手がいったん降りてきて、手で昇降式の遮断機をガラガラと下ろしました。国道には踏切と連動する青と赤のみの信号機がありこの遮断機を下ろした時信号が赤に変わりました。この貨物列車が通るのはせいぜい1日1～2回ほどだったので、国道の信号機はほとんど青が点灯していました。加藤製のポロポロのDLが今にも壊れるかと思うくらい煙を吐きながら貨車を引き急いで国道を横断する姿は、鉄道ファンではなくても覚えているのではないのでしょうか。

今月号の図-2を参考にいただき、国道を渡り切った所にはもう1本赤十字病院前から北側の木田銀座商店街へ延びる道があり、ここを横断するためもうひとつ踏切警報機がありました。この道は福井駅前から赤十字病院への路線バスのルートであり、図-2にも記載されているよう、現在のフェニックス通りを南進し、月見町歩道橋付近にて大きくユーターンし赤十字病院へと向かいました。そして帰路は専用線をまたぎ狭い木田銀座商店街の中を通り福井駅前へと戻って行きました。今考えれば、当時はバスも小さなボンネットタイプも使っており、大きな急カーブや狭い道も通行可能であったことが懐かしいです。

いよいよ専用線はこの危ない難所(?)を乗り越え大和紡績の敷地内へとはいって行きますが、現在の福井トヨペットの社屋正面には大和紡績入り口の門柱があり右側にゆるくカーブしながら入って行きました。この付近でも鉄道の痕跡を残すものは何もなく唯一写真⑨に写っている白い建物が大和紡績の社宅であったことやトヨペットの東側に残る塀が民家との境でした。

話は変わりますが、福井をロケ地として作られた日活の映画で『朝霧』（主演 和泉雅子・杉良太郎・昭和43年(1968)制作、昭和46年公開)というのがあります。和泉雅子が赤十字病院の看護婦にふんし、母一人、子一人の家庭で思春期から大人に成長しようとしている娘の姿と、母との心の交流を日本海側の厳しい自然を背景に描いた作品で、昔の福井の地が数多く出ています(北陸本線を横断する陸橋・呉服町・新栄商店街・足羽川鉄橋など)。そして、この大和紡績入り口付近でのシーンで当時の画像がはっきりと映っています(図-2の㉑の位置)。門柱・石畳の線路・まだ舗装されていない日赤前通り・大和紡社宅などバックの足羽山から位置が特定できます。

敷地内へ入った線路は写真⑩みのり2丁目公園へと進みますが、ここにはかつて片開きの分岐器があり貨車のワムが留置されていました。ここに来るといつも貨車のブレーキの空気を抜いて遊んだものでした。

この付近には会社の大きなグラウンドがあり運動会や社員の多目的広場として利用されていました。社員用の銭湯や男女の寮・木造の大きな講堂などもあり会社の中心地でした。またこの辺りは工場内と違い一般民家とは塀によって仕切られていましたが、だれでも出入りは自由でした。

大和紡績の社員や家族の方は、近くの木田銀座商店街で買い物をし、唯一2件あった食堂『浪花食堂』や『清南軒』で外食をし、映画館『橋南劇場』にて休日を楽しませておりました。

『福井市の昭和』(平成24年 いき出版)p180に昭和45年とされる写真があります。これは図-2で㉑の地点から一般民家と敷地内の境目で石畳の線路を撮ったものです。わずかに先に分岐器が見えます。(著作権が絡むので

転載しないが、図書館で見たいきたい[渡邊])。

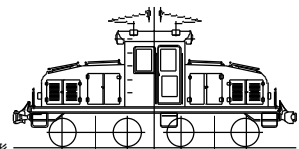
線路はこの後正面玄関手前で工場敷地内へ入り、二つに分かれ1本は直進し工場群へ、もう1本は西進しさらに奥の工場群へと進み写真⑫の位置へと延びてましたが、今現在この地は新しい住宅が建ち並ぶ中心地であり、鉄道があったことなど痕跡どころか雰囲気さえ全く感じられません。

冒頭にも述べましたが、ほとんど痕跡を残していない廃線跡巡りには、当時の地図や資料が必要です。そして地元でかつての鉄道を知っている人からの証言こそが唯一の生きた資料となります。今回は地元の年配の方を中心に情報を取り自分の記憶とすり合わせてほぼ正確な情報として述べました。私も小学校時代は大和紡績に勤める親を持つ友人がいましたが、会社が無くなってからはその友人もいなくなり音信不通です。知っている人や覚えている人から情報を聞き出すこと、また廃線跡付近に住まわれている方は写真などお持ちになっているケースもありますので、大変ですが地道に声掛けして聞き出すことが生きた資料へとつながるのではないのでしょうか。ただ、生き証人はいつまでもおりません・・・。

以上、渡邊さんの素晴らしい研究に対して恐れ入りますが地元在住としてコメントさせていただきました。少しでも参考になれば幸いです。ありがとうございました。

図-2の㉑の画像は著作権にて転載できませんが、映画『朝霧』のDVDと㉑の画像資料は個人的に所持していますので、ご希望の方は申し付けください。

和田 一彦



福井鉄道 デキ3形

[6] そのほかの専用線

福武線にはこのほか以下の専用線があったようだ。これらはいずれも駅に隣接した施設への引込線で素人目には構内線と見分けが付けがたく、0.5kmを超えるのは大和紡専用線のみであった。

- [花堂] 福井倉庫専用線、
北陸化成工業および三菱石油専用線
- [浅水] 麻生津農協専用線
- [西武生] 大協石油武生油槽所専用線



写真-⑬ 福井倉庫専用線跡 花堂駅北側踏切
レールが残されたまま 平成30年10月6日

このうち花堂には廃レールが埋まったままの踏切など、多くの痕跡がある。

別件でデキ3・デキ11に関する資料を収集しているが、デキ3がワムやトラを引いている写真はあまりなく、タンク車を引いている

写真が目立った。西武生(現・北府)駅に隣接して大協石油武生油槽所があったからだが、昭和54年(1979)11月、福井臨港への統合移転で閉鎖された。これで武生新-西武生間に設定されていた定期貨物列車がなくなり、福井鉄道の貨物輸送は終焉を迎えた。



写真-⑭ 大協石油武生油槽所専用線跡 北府駅
手前から3本目の架線柱が本線より1線分離して立っている 平成30年10月14日

[7] おわりに

廃線跡といえば過疎化した田舎が定番だが、意外と身近なところにもあることを再発見した。会員諸兄も一度歩いてみることをお勧めするとともに、本稿執筆に当たって甚大な協力をいただいた和田会員に謝辞を述べてむすびとしたい。



酒井雅光アルバムから [10] — EF81型交直両用電気機関車 1号機 —

国鉄の幹線電化が進んできた昭和43年(1968)の暮れ、北陸線の20kV60Hz交流、信越線の1500V直流、羽越線の20kV50Hz交流区間を通し運用できる機関車1両が量産先行車として日立で製造された。

当時の国鉄では機関車の車号を東に位置するメーカー順としていた。直流機では東洋・汽車(東京)が先で川車・川電(神戸)があと、交流・交直流機では日立(茨城水戸)→東芝(東京府中)→三菱(広島三原)の順であった。EF81は初回に1両しか発注されなかったので日立車なのは当然としても、EF70、EF80、ED75、ED76、ED77、ED78などの1号機がすべて日立車なのはこのルールによったからである。ED70とED74は全機が三菱製。ED72とED73は全機が東芝製で、東芝はED75・76なども手がけているが、今日に至るまで東芝製機関車が北陸線を走ったことはない。(7ページへ続く)



EF81 1号機 昭和44年 田村駅 中谷正



身近な鉄道を観光資源に

岸本 雅行

今年の6月末、岐阜県から高校生(数校で構成する地域研究クラブの生徒)と引率教員の計50名ほどのグループが大型バス1台で研修のため福井県を訪れました。引率教員の1人が私の知人であったため、研修の案内を依頼されました。日帰り研修であったため、一乗谷朝倉氏遺跡・福井駅西口再開発・北ノ庄城跡・敦賀ムゼウムなどを駆け足で巡りました。地理・歴史の好きな生徒のグループなので見学場所ではメモをとるなど熱心に私の話を聞いてくれましたが、彼らが歓声を上げたのは、福井駅前の動く恐竜と福井鉄道の低床車両フクラムでした。動く恐竜に歓声を上げるのは予想していましたが、鉄道ファンでもない高校生がフクラムにそれほど注目するとは想定外の出来事でした。岐阜県の高校生にとって路面電車は珍しいようで、おしゃれなフクラムに新鮮な印象を受けたようでした。ただ、フクラム以外の福井鉄道の車両は岐阜からやってきた(元名鉄の岐阜市内線で活躍していた)と説明しても、懐かしがるのは引率の教員だけで、高校生(廃線当時は4歳くらい)にとってはあまり関心がないようでしたが。案内をしていて、フクラムなど身近な鉄道も観光資源として十分に活用できるのではないかということを感じました。

先日の福井国体・障スポの開催期間中、送迎バスに乗った県外からの選手・役員が身を乗り出すようにしてフクラムの走行を珍しそうに眺めているのを何度か見ました。県外から応援に来ていた2人の警察官(私服で出身県警の腕章をしていた)が、警備中の歩道から電停まで珍しそうにフクラムを見学に来る光景も目撃しました。県外からの訪問者にとって、3両連結の低床車両フクラムはかなりのインパクトがあるように見受けられました。

私が以前から思っていることですが、雑然として道幅の狭い駅前電車通りを岐阜からやってきた古い路面電車がノロノロ走る光景(写真-1)は、香港のノースポイント(北角)界わ



写真-1 880形(元名鉄)



写真-2 F1000形フクラム

いを連想させます。(香港は2階建て電車ですが)また、フクラム(写真-2)が静かに進入して来ると、ヨーロッパのどこかの街角にいるような錯覚に陥ります。日本の路面電車が走る街角の中でも、このような光景の地域は他にはないと思います。テレビコマーシャルの撮影などを誘致し、人気スポットとして情報発信をすれば、全国の注目を浴びる可能性もあります。そして、トランジットモールとして整備されれば最高です。さらに、えちぜん鉄道と福井鉄道を結ぶ鉄道と軌道の相互乗り入れも珍しく、工夫次第では鉄道ファン以外の観光客も呼び込めるのではないのでしょうか。

私たち福井県民が通常見慣れている鉄道の風景も、県外からの訪問者にとっては新鮮な感動を呼び覚ますことも多くあるようです。北陸新幹線の敦賀開業が間近に迫った昨今、観光資源として身近な鉄道の活用も考えてみてはどうでしょうか。



9月見学会(京福電鉄勝山～大野間廃線跡巡り)報告

和田 一彦

9月の見学会は、勝山～大野間の廃線跡巡りを行いました。12:30えち鉄勝山駅集合。支部会員12名の参加であいにくの雨の天候でしたが無事実施いたしました。今回は地元である渡邊編集委員の力をお借りし以前ご自身で巡られたコースを見学してきました。

勝山駅からの説明に始まり、大袋駅跡までの直線区間や一本残された架線柱など見学。今回のハイライトである下荒井六呂師口駅跡では、駅舎がそのまま民家に利用されており、横のトンネル坑口の狭さにはよくここを電車が通っていたものかと驚かされました。また



下荒井トンネル勝山側坑口で 上田 弘文

このトンネルができる以前は山裾を回り、反対側の赤根川鉄橋へと旧線跡が残るが、崖を登らなければならないため今回は見合わせました。次回雑草の少ない春先にでも是非訪れてみたいものです。越美北線との交差下では、通過するキハ120を撮影しその先の大野口駅

跡へ移動、かつての貨物の一大集積地であった広い敷地から駅跡の雰囲気を感じました。そして終点の京福大野駅跡地では、昔の写真と現在のものを見比べ、大きく変わってしまった中にも、ここにはかつて電車が来ており駅前商店もあり、大野の玄関口であったことを感じました。

今回の見学会にあたりましては、渡邊編集委員の多大なるお力を借り、立派なガイドブックを作成していただき、さらに当日は案内役としてご尽力頂きました。大雨で足元の悪い日となりましたが、資料の充実と適切な案内で今回の見学会が充実したものになったと感じております。ガイドブック製本していただいた上田さん、当日お車を出していただいた、野尻事務局長・山本・渡邊・上田・山岸様にもこの場をお借りしましてお礼申し上げます。ありがとうございました。



酒井雅光アルバムから [10] — EF81型交直両用電気機関車 1号機 —

(5ページより続き) 2号機以降と外観上の相違点は、前面に尾灯と並んで埋め込まれた空気笛であるが、これはほどなく屋上に移設されている。内部の相違点は割愛する。

この時代既にED77・78でサイリスタによる位相制御技術が確立しており、その発展形でチョップ制御とするのが順当だが、開発期間と費用の点から見送られ、EF65をベースに交流機器を追加するだけとなった。したがって“交流区間も走れる直流機関車”であるから起動抵抗損があり、粘着特性も特に良いわけではない。D形機でじゅうぶんな交流区間の平たん線でもF形機を必要とする。鉄マニアには“万能型機関車”と賞賛されたが、交流機関車としては一步も二歩も後退しているのである。

1号機は富山第二機関区に配備され、信越線電化開業の昭和44年10月までの間、糸魚川-米原間からさらに東海道線にも出て性能試験が行われた。この点が量産先行車と称されたゆえんでもある。写真はこのときの1コマであろう。この写真を撮った中谷正氏は当支部発起人の1人で2代目支部長。在任期間は昭和57年秋から昭和60年12月。この写真の頃は近江塩津駅長から田村駅長を、その後は鯖江駅長も務められ、退職後の昭和60年暮れに永久の旅に就かれた。

1号機はその後、国鉄民営化時にJR貨物の所属となったが富山二区から離れることはないまま、平成15年度に老朽化により廃車された。車歴39年はED701やEF701と比べるまでもない。(渡邊)

事務局だより

◎ よくわかる県政出前トーク「並行在来線」(11月例会)のご案内

11月18日(日)10時～12時 (通常の例会と時刻が異なります。)

福井駅東口『アオッサ』7階 706号室

11月例会は県庁の地域鉄道課の担当者に来ていただき、並行在来線の説明をしていただきます。並行在来線の現状や今後のスケジュールなど、鉄道ファンにとって興味のあるお話をしていただく予定です。県政出前トーク終了後は通常の例会となり、DVD視聴、情報交換会などを予定しています。多数ご参加くださいますようご案内申し上げます。なお、資料の準備のため参加人数を確認したいので、参加希望の方は11月11日(日)17時まで事務局に連絡ください。



【連絡先】 メール：msnojiri@estate.ocn.ne.jp 電話：090-2124-4136

メールで申し込まれた場合は、確認の返信メールを送らせていただきます。

電話で申し込まれる際、日中電話に出られない場合がありますのでご了承ください。

◎ 南正時鉄道写真展(越前市)において模型運転会開催

12月23日(日)10時～17時 越前市「ふるさとギャラリー^{しくら}叔羅」

今年の7～9月に福井県子ども歴史文化館で「南正時鉄道写真展」が開催されましたが、好評であったため越前市でも開催されることになりました[12月12日(水)～26日(水)]。前回の写真の他に、越前市近辺の懐かしい写真も展示されるそうです。トークショーが開かれる23日に模型運転会を行ってほしいと越前市から依頼がありましたので、協力することにしました。前回同様、多数の会員の皆様のご来場をお待ちしています。なお、搬入・組み立ては前日(22日)の15時～17時に行います。ご協力いただける方はよろしくお願ひします。「ふるさとギャラリー^{しくら}叔羅」は旧国道8号線沿いの紫式部公園東側(東千福町)で、駐車場は十分にあります。月～土曜日は市民バス「のろっさ」(「叔羅」下車)を利用できますが、トークショー・模型運転会のある日曜日は残念ながら運休となっています。

鉄道友の会 福井



県内の映画界では「えち鉄物語」が耳目を集めているが、50年前にも福井県と福井市が協賛して、県内各地でロケした映画があった。和田会員が発掘された日活映画「朝霧」である(本号4ページ)。氏の好意でDVDを鑑賞させてもらった。物語は朝霧漂う余呉湖畔の急行「こがね」で始まる。ボックス席には冷凍みかんに四角い土瓶のお茶。土瓶のふたが湯飲みになり、今ならティーバッグと呼ぶ布袋に茶葉が入っていた。確か値段は10円、売り子さんは大きなヤカンを提げていて、飲み干してお湯だけ注いでもらうと5円だった。せりふの中に「今年には福井で国体が開かれる」とも。そして50年後の今年、2巡目の国体が開かれた。未練らしいように恐縮だが、お召し列車も御乗用列車も走らなかつたのは心残りである。《渡邊》

終着駅

平成30年度 福井支部役員	
支 部 長	岸本 雅行
事 務 局 長	野尻 繁生
会 計	西口 佳志
企 画	和田 一彦
わだち編集委員	渡 邊 誠
情 報 委 員	上田 弘文
監 事	中山 博幸
	森家 和治

投稿は偶数月20日までに
 テキストファイル(.txt)で
mako_chan@sea.plala.or.jp
 へお送りください。